

7のひら
掌の花





馬蹄山の上空に湧き起こった黒雲がにわか空一面を覆い、季節はずれの雹が町の屋根屋根を直撃したのち、からりと晴れあがった空に円形の虹がぶかりと浮かんで、消えた。

町の中央に位置する公園の槐の樹の下で、白塗りのベンチにたむろし、日溜りの底でパイプをくゆらせ、昔話の花を咲かせるのを日課とする町の古老達は、円形の虹は百年に一度の吉兆だ、何かとてつもない良事が町に起こるに違いないと、口々に騒いでいたが、その騒ぎも次第に小さくなって、やがて消滅し、古老達は再びおとぎ話じみた昔話の世界に帰っていった。

一週間後、馬蹄山から吹きおりの暖かい風に乗って、胞子が僕の掌に舞い落ち、みるみるうちに育って、やがて五角形の桔梗色した花が一輪、風に揺らめきだした。

次の日、僕は植物学者の門を叩いた。植物学者は今にも折れそうな小枝のような指で花をいじくり、やがて栄養失調の蚊が鳴くような声で、形態はいかにも花のようですが、植物ではありません。私がひとり、優秀な微生物学者を知っていますから、そちらに行つて診てもらって下さい。それにしても不思議なものですねえと言った。

微生物学者の研究室に行くと、赤い蝶ネクタイを小意気に締めた微生物学者はラジカセから流れるジャズにあわせて体を揺すりながら、カップラーメンを啜っていた。

ラーメンを啜りながら、紹介状の封を切り、フムフムと目を通した彼は、残念でしたあ、とクイズ番組の解答者のような軽い声をあげた。

目で見えるものは私の領域じゃないですよと笑い、しかし、まあ、せっかくだからと、さまざまの細菌やウイルスを顕微鏡で見せてくれた。彼の好意は有難かったが、僕はただ目が痛くなっただけだった。

花はその後も、大きくもならず、又、そのまま立ち枯れることもなく、僕の左掌の上で咲き続けた。僕の掌に枯梗色の花が咲いていることが知れわたると、あやしげな人物たちが僕のまわりをうろろするようになった。

彼らは僕の掌に咲く花の珍しさに注目し、株や貴金属を買うようなつもりで、花を買いたいと僕に申し込んだ。僕が断わるたびに、花の値段はつりあがり、とうとう一千万円という破格の値までついた。

しかし、僕の掌の花が素敵だから、ぜひ譲って欲しいと言われたら、喜んで無償で譲っただろうが、はっきりと金目当ての人物に花を譲る気にはどうしてもなれなかった。

とは言え、実際には花が掌に咲いているのは不便極まりなかった。

花が咲いているのは左手だったから、字を書くには困らなかったが、左手を伏せて、字を書いているあいだ、紙が動かないように押さえることはできなかった。紙が動かないようにするには、左手の甲で紙を押さえなければならなかったが、やってみればわかることだが、この姿勢はひどく疲れ、長くは続けられなかった。

又、顔を洗うのも大変だった。つい習慣で両手で洗うと花の棘で顔じゅう血だらけになった。そのため、右手一本で顔を洗うしかなかった。

一事が万事、この調子だったが、もっとも困ったのは恋人の由美と寝るときだった。彼女を抱き締めるたび、彼女の素肌に花の棘がささり、抱擁どころではなかった。

ある晩、とうとう由美はベッドの中で、「私か花か、どっちをとるか、はっきりさせて」と悲鳴をあげた。彼女の言うことももっともだった。映画を観て、珈琲を飲んで、公園のベンチでお喋りをしたあと、握手をして別れる――僕たちはそんな関係をとくに卒業してしまっている。

僕は彼女をとり、花を捨てることを宣言した。どうしてこんな簡単なことを今まで思いつかなかったのか不思議なぐらいだった。僕は掌の花を運命のごとく受け入れ、不便さを忍ぶことはしても、捨てることを思いつきもしなかったのである。

しかし、いざ花を捨てようというときになってはじめて、僕は花を捨てるのが容易ならぬことに気づいた。花は茎を持ってひっぱっても、掌の皮と一緒にくっついて動くだけで引っこぬけなかった。

石鹸や油を塗って滑りをよくしても駄目だった。由美にも助力を頼み、二人で根限りの力で引っ張っても、花は掌から剥がれようとしなない。

僕は自分の肉を少し犠牲にしてもと思い、薄くナイフで掌の皮を切ってみたが、花は深く肉に根を張っていて、花を捨てるには、手を切り落とすしかなかった。当然ながら僕は左手を失う気にはならなかった。最後の手段として、茎を根もと近くで切り、自然に根の枯れるのを待つことにした。

剪定鋏で茎を切りとり、ぐったりとなった花を屑かごに投げ捨てたあと、僕たちはワインで乾杯した。

これで、やっと忌々しい花と別れられる。僕たちのそんな思いは、しかし、わずか五分しか続かなかつた。切り残した茎から、五分経つか経たぬかのうちに、新しく茎が伸び、その先には桔梗色の花びらが涼しげに揺れていた。何度、茎を切断しても、結果は同じだった。

由美は一晩じゅう泣きつづけ、あくる朝、僕を捨てた。

一カ月後、僕は地元テレビ局の取材を受けた。現代の奇跡、掌に咲いた花というタイトルで三十分番組を作りたいというディレクターの提案を僕は承諾した。要するに、体のいい見世物だったが、由美と別れた日以来、僕は自分の運命をなんでも受け入れる心境になっていた。

たかが女一人のことだと笑われるだろうか。二十歳の僕にとって、一人の女を失うことは全世界を失うと同じことだった。

番組はおどろおどろしい曲で始まり、それから掌に花が咲いた日の驚きを告白する僕の声と横顔が映り、掌の花のアップがあり、そのあと女性アナウンサーが引きまわし役となり、学者や予言者、心霊師たちにインタビューをするという構成だった。

驚いたことに、僕が以前、訪ねた植物学者、微生物学者はどちらも、あときは自分の専門分野のものではないと断言したくせに、テレビの中ではよくわからないがと断りながらも、おそらく自分の専門領域のものではないかと述べていた。

予言者は、まぎれもなく世紀末現象の一つであり、他人事ではなく、ある朝、目が覚めてみたら、あなた

の掌にも同様の花が揺れているかもしれないと視聴者をおどした。

心霊師に言わせると、僕の祖先の中に魂の成仏できていない人がいて、それが花となって、僕に助けを求めているのだという。

後日、放映されたテレビをみていて、僕は妙なことに気づいた。アップで掌の花が映るたび、花はかすかにカメラの方にむかってゆらめいていて、単なる偶然とは言えぬ不自然さを僕はその動きに感じた。

三日後、僕はテレビを見たという少女の訪問を受けた。彼女はチーズケーキを手みやげに持って来ていた。彼女のもつて来たチーズケーキを前に紅茶を入れて、飲みながら僕は少女の話聞いた。

テレビを見て、いろいろ迷ったけれど、やっぱりある事をお願いしたくて訪ねて来たんですと彼女は言った。

彼女手づくりのチーズケーキのためばかりでなく、僕はある事がどんな事か聞かないうちから、少女の願いをきく気になっていた。

少女にとまなわれるまま、僕は彼女の父親の入院している病院にかけた。彼女の父親は癌の末期でベッドに臥しており、なお悪いことに、彼の職業は内科医で自分の病氣のことを知っていて、死を観念していた。

彼女は僕の掌の花をベッドの父に見せ、「世の中にはこんな奇跡もあるのだから、お父さんだって最後まで望みを捨てないで」と涙を流しながら、訴えた。

父親は僕の掌の花が造花やセロテープでくつつけたものでないことを確認し、それから「そうだな。俺も頑張らなくちゃ」と言い、僕にお礼をのべた。それは死を予定された人間が死を他人事と思ひこんでいる人間に示す最大のやさしさのように僕には思えた。

一月後、再度、僕は少女の訪問を受けた。

彼女は赤いバラを腕いっぱい抱えて来、僕の部屋をバラの匂いで充たした。

「この前は有難とうございました。あれから父も元気になり、生への望みを語るようになりました」と彼女は言った。

「それじゃあ、奇跡が起こったの?」

「いえ、奇跡は起こりませんでした。父は亡くなりました。四日前に」

「そう」僕は次に言うべき言葉を失った。

「私、今、考えてみたら、かえって父に悪いことをしたような気がするんです」

「というと?」

「あの日以来、父は生きる望みを喋るようになりました。でも、それは父の本心ではありません。父は本心では死を、死のことばかりを考えていたんです。私はかえって、父に嘘をつかせてしまった……」

「お父さんはきつと、君のそんな気持ちがあうれしかったと思うよ。わざわざ、僕の掌の花を見せてまで、お父さんを励まそうとした君の気持ち」

「そうでしょうか?」

「そうだよ。お父さんは喜んで嘘をついたんだ」

沙耶加は僕のだした紅茶を飲み、人心地ひとこころついたあとで、

「又、お部屋に来てもいいですか?」と言った。

「あなたの掌の花をみていると、なんだかとても落ち着くの」

僕に断る理由はなかった。

馬蹄山の雑木林はすっかり落葉し、裸になった枝々の隙き間から北風が流れこんで来た。その間に中南米ではクーデターが頻発し、隣の家のシェパードが雑種を四匹産み落とした。

沙耶加はあれから、僕の部屋にしょっちゅう出入りするようになり、僕と将来を誓う仲になっていた。彼女と付き合いだしてから、僕に運が向いてきたようだった。出展するたびに、落選していた僕のリトグラフが金賞を射止め、画廊で開いた初の個展も好評で、おもしろいように売れた。

僕は次第に掌の花の存在に不便を覚えなくなり、それどころか沙耶加が花を可愛いがるので、僕も掌の花をいとおしくさえ感じだしていた。

そんなある日、花が掌から消えてしまった。最初に花の消えたのに気づいたのは、僕ではなく沙耶加だった。夜明け前、僕に寄り添って来た彼女が、発見したのである。

僕は飛び起き、ベッドの下や床の上を捜したりしたが、花は見つからなかった。

死と生のはざま

1975 大山、冬



あれ程、捨てようとしたときにはどうしても剥がれなかった掌の花が、いとおしくさえ感じ始めた矢先、消えてなくなるとは皮肉な話だった。

しかし、しばらくは花のない左手を見ると淋しさを感じていた僕も、日が経つにつれ、掌の花が消えたことを喜ぶ心境になった。不便さに慣れて来ていたとは言え、こうなってみると、やはり花のない方が自然で、便利だった。

三カ月後、街路樹がいつせいに芽吹きはじめた街角で僕は花と出合った。花は盲導犬に姿をかえていたが、僕には彼女だとすぐにわかった。

横断歩道ですれ違う瞬間、全盲の老女を引いた彼女は、

(元気？ 彼女と仲よくしてる？)と突然、僕の頭の中に話しかけてきた。

(元気さ。彼女とはうまくいってるよ)と僕は心の中で答えた。

横断歩道を渡り切って、うしろをふりかえると、彼女は盲導犬になりきって、目の不自由な老女の歩行を助けていた。

角を曲がる際、彼女はこちらをちらつと見て、(それじゃあ、また)と言った。

(それじゃあ、また)と僕も言い、僕たちは別れた。そして、それっきり、二度と会うことはなかった。

(了)